

ボランティアから つながる一歩

- 卒業生が語る未来の話 -

2021年 4月22日(木)、30日(金)

報告

東京都市大学
Volunteer Center
EST.2016

卒業生に聞く！

ボランティアからつながる一歩

- 卒業生が語る未来の話 -

開催日：04.22/04.30 昼休み (12:10-12:50)
会場：オンライン (Zoomミーティング)

■ 卒業生が学生時代を振り返る！

4月22日、30日の二日間、学生時代に「都立大ボランティアプログラム」や「学生コーディネーター」といったボランティアセンターが運営する活動をはじめ、学内外の多種多様なボランティア活動に参加してきた卒業生二人をお招きし、「ボランティアからつながる一歩-卒業生が語る未来の話-」をオンラインで開催しました。

当日は、ゲストの卒業生から学生時代にボランティア活動を通して得た経験や気づき、さらに、現在社会人として活躍されている立場から、学生時代のボランティア活動経験が現在のキャリアに、どのように活かされているのかについて、様々なエピソードとともにお聞きしました。

第一回では14名、第二回では7名にご参加いただきました。

■ 第一回：神保 彩乃（じんぼう あやの）さん

2019年度 卒業生：都市教養学部 都市教養学科 経営学系
現在の職業：福祉サービス企業のコンプライアンス業務

学生時代は、東京都障害者スポーツ大会などの運営ボランティアやスポーツを通じた地域交流に取り組む。
その他、路上生活者支援や台風で被災した地域での災害ボランティア活動などを幅広く経験。都立大ボラセンの学生コーディネーターとしても活躍した。

質問

自己紹介をお願いします！



みなさんこんにちは、神保と申します。
私は2019年度の卒業生なので、首都大学東京のラストの時代ですね。その年に経営学系を卒業しました。

現在は高齢者福祉サービスを行っている株式会社で本社の事務職として働いております。コンプライアンス室というところに所属していて、全国にデイサービスとか有料老人ホームというような事業所がたくさんある会社に勤めているので、その事業所一つひとつが法令を守って適正に運営できているのかというようなことを確認する役割を担っています。

質問

ボランティア活動を始めようと思ったきっかけのようなものはありましたか？

私は大学生の頃からボランティア活動を始めたのですが、少し遡って

高校3年生の時、出身地である栃木県宇都宮市の自分の住んでいる地域の近くで豪雨災害の被害がありました。被害の様子が連日ニュースで報道されている中で、学生がボランティア活動をしている様子もニュースで映し出されたんですね。それが私はすごく衝撃的でして、学生がボランティアをするという選択肢があるんだということに、その映像を見て一番驚きました。

そこからずっとボランティア活動してみたいなと考えながら、2016年に進学をして、その年に本当に、運命的か分からないんですけども、当時の首都大にボランティアセンターが設立されました。そのニュースが私の耳に入った時もこれは本当に運命だなと思って、もういってしまえば私のためにこのボラセンが設立されたんだって勘違いをするほど魅力を感じて、もう大学に行きたくてボラセンに足を運んで、「何でもいいのでボランティアさせてください、やりたいです」とお話ししたのが、まず最初のきっかけだったかなと思います。

質問



4年間取り組んだ
ボランティア活動の中で
自分のターニングポイントに
なった活動はありましたか？

今パッと浮かんだのは、すごくいい意味でも悪い意味でも私のターニングポイントになった活動の現場でして、先ほども路上生活者支援の活動に携わっていたと話したのですが、その活動をしているある日ですね、路上に住まれている方のおうちに一枚の張り紙が貼ってあったんですね。なんて書いてあるんだろうって見てみると「この場所は〇月〇日までマラソン大会で使うので移動してください。ここにはいられません」という趣旨の張り紙だったんですね。そこで私にはモヤモヤポイントが二つ出てきました。

一つ目が、「こういうふうに簡単に路上に住まれている方の暮らしが奪われてしまう可能性ってあるんだな」ということ、さらにもっとガツンときた二つ目のモヤモヤが、その張り紙に書いてあったマラソン大会に私はボランティアとして参加をする予定だったということです。すごく何とも言えない感情を抱いたのを今でも覚えてます。私はその二つの活動どちらも大好きなんです。マラソン大会も大好きだし、路上生活者支援の活動ももちろん大好きだし、どちらも関わり続けていたのに、この二つの活動がなんかお互いに相手を認められていないというか、そういう不思議な関係性をその現場で目撃して、やっぱり今社会が複雑に絡み合っている中で、いろんなことを知らないってすごく怖いことだなと思った経験でした。

ふと出た言葉が誰かを傷つけてしまっていたりとか、あることをやろうと思っていても反対側とか陰に潜んでいるもう一つのことに見向きができていなかったらそれを蔑ろにしてしまったりする可能性ってたくさんあるんだろうなと思ったことがきっかけで、とりあえず今の段

階では知らないことが多すぎるから、いろんな社会を知っているんな人と話そうと思うようになりました。

それが2年生の冬だったのですが、それからまたさらにボランティア活動にのめり込むようになっていって、活動分野を定めず広くやっていくことでいろんな人に会って、年齢等も特に気にせず、いろんな人と話せる活動に参加するようになったことが大きかったと思います。

良い意味でも悪い意味でも、私はその二つの矛盾みたいところに何もアプローチできなかったの、自分の力不足をとて感じたのですが、「それを知っている人間ではずっとという、矛盾していることがあるかもしれないということをずっと頭に留めておける人間になろう」と思ったきっかけでもありました。その張り紙1枚の目撃シーンだけだったのですが、印象に残っています。

大きなスポーツの大会と路上生活者の生活が重なって、さらにそこに自分の生活も重なっていったんですね。今までももしかしたらそこに距離を置いていたり、見えていなかったり、自分の生活が重ならなかったから考えられなかったりしたのかもしれませんが、そこで考えただけじゃなくて、自分のその後の生活への関わりを創っていったということがすごく大きいですね。

質問

ボランティア活動の経験は卒業後のキャリアの中で、どのように生きていますか？

経営学系の学生だった私は3年生から、ヒューマンリソースマネジメントという、ざっくり言うと「人が働くってどういうこと」とか「人がやりがいをもって働くにはどうしたらいいんだろう」とみたいなことをテーマとして扱うゼミに所属していました。そのおかげもあり、人が働くということに漠然と大きな関心がありました。そのゼミの活動をボランティア活動と並行して進めていたのですが、ボランティア活動をしているある日、障がい者施設との出会いがありました。そこで働いている方、その方は障がいのある方をサポートする役割で働いている方だったのですが、ボランティアの私に「こういう場所があるっていうことを、こういう仕事があるっていうことを知ってもらえるだけでも嬉しいんだ」とすごく複雑そうな顔をしてお話しされるんですね。その言葉を聞いた瞬間に素直に「なんでこういう言葉が出てくるんだろう」と思いました。でもよく考えてみると福祉現場で働いている方って大切な仕事をされているのにあまり認知されていない部分があるんだろうなと思いましたし、つらいんでしょうとか、給料が低いんでしょうとか、きついんでしょうとか、大変な部分だけ目立っている気がするなど、その方の言葉を聞いて思ったんです。

私はそのボランティア経験から、じゃあそういう人たちをサポートできる仕事に何か就けないかなと考えるようになりました。そこが私の職業を決めるきっかけになった一番の出来事でした。

さらに、自分が進んで行こうという道を決めた後に考えたことがありました。それは、福祉サービスをしているところがたくさんある中で、「どういう形態で働こう」「どういう分野で働こう」「どういう立場で働こう」というポイント、この三つです。

一つ目の「どういう形態で働こう」についてですが、福祉サービスは株式会社でやっているところもあれば、NPO（法人）や社会福祉法人としてやっているところもあります。その中で自分は株式会社を選んだのですが、自分が関わったことがなかったということももちろん、サービスとして利益を求めて取り組むことでお客さんに高品質なサービスが届けられる、働いている人たちにも働いた分の還元ができる、それはどこだろうって考えたときに、株式会社の方が強いのかなと思った、そのことがきっかけになったと思います。

その後、株式会社の福祉サービス系の分野で、一番発展し、一番社会的に認知されているのはどこなだろうと考えた時に、私はそこは高齢者分野だなと思ったので、そこに絞って職業を探すことにしました。

また、そこに関わる立場としては、私はずっと人が働くということに興味があったのでそこだけはずっとブレずに、自分が実際にお客さんに対してケアをするというわけではなく、「そのケアをしている働いている人のサポートができる立場になろう」と考えました。

現在、本社総合職で働いているので、現場から一歩離れた場所で現場をバックアップする、サポートする立場としての仕事につながっていると思います。私は自分の専門分野を通して「人が働くってどういうことなんだろう」ということをずっと考えていて、そこにボランティアの経験とか、ボランティアで出会った人たちの声とかいろいろ繋がって、重なって、自分が歩んで行こうかなって思える道が決まっていたなと思います。私は本当にボランティアが色々私の人生に対してもつながっているなと感じていますね。

質問

学生時代は日常生活の中にボランティア活動があふれていて、それが当たり前になっていたと思いますが、社会人になってから、仕事以外の日常生活の部分での変化はありましたか？

今2年目で、仕事にも慣れてきて自分の自由な時間もつくれるようになっていたのですが、そこでの実体験が最近ありましたので、それ共有したいと思います。

2年目になって、もう少し自分が住んでいる地域とつながりたいなとやっぱり思ったんですね。そこで、私の住んでいる地域の近くに商店街があるので、色々つながりをもっていろんな活動することができないかなと、去年の12月頃から構想を練っていました。商店街に電話もして連絡をとろうとしてみたのですが、なかなかつながらず、結局お話をできるかなっていう目途がついたのが、来月の5月頃になってしまいました。

自分が活動をしたいという思いをもってアクションを起こしているのに、活動先に繋がるまでに半年間もかけることになってしまったんですね。それって私は大学生時代だったらありえなかったなと思います。というのも、いろんなつながりをもっている大学ボラセンが私の近くにあって、そこにいつでも通える体制があって、その職員さんに相談すれば「こうした方がいいんじゃない」というアドバイスももらえる。そういう体制が整っているからこそ、先ほど話した小学校でのスポーツ体験会のように、もっと短期間で半年なんてかずに構想がまとまっていたのかなと思います。そう考えると、やっぱり社会人として、一市民として地域とつながる、地域の団体とつながることって結構ハードルが高いんだなと、実体験を通して感じています。

なので大学にボランティアセンターがあったり、相談できる人がいたり、また大学の先生にはいろんなつながりをもっている人が多かったりすると思うので、自分の味方になってくれる人を増やせるっていうのは、学生時代の方がやっぱり強かったのかな、そこは学生ならではの力だったのかなと、今社会人になって、地域とつながろうとしている一市民として、難しさとともに強く感じています。



都立大ボラセンYouTubeチャンネルにて
当日の様子を公開中！



■ 第二回：水越 智一（みずこし ともかず）さん

2018年度 卒業生（2016年度 学部卒業）：

システムデザイン学部 航空宇宙システム工学科
→システムデザイン研究科 航空宇宙システム工学科

現在の職業：自動車部品メーカーの設計

学生時代は、東日本大震災の被災地支援（宮城県七ヶ浜町）をはじめ、東京マラソンなどのスポーツボランティア活動に取り組む。また、都立大ボラセンの初代学生コーディネーターとして、都立大ボランティアの機運醸成にも取り組んだ。

質問

自己紹介をお願いします！



私は水越智一と申しまして、2019年の3月に卒業して、今ちょうど3年目になったところです。出身は東京で、当時の首都大学東京システムデザイン学部 航空宇宙システム工学科に入学をしました。その後、そのまま大学院に進学して、そこを卒業してからは、愛知県にある自動車の部品メーカーに就職したので、今は愛知県に住んでいます。

学生時代は、1年生の終わり（春）頃からボランティア活動を始めて、当時はよく東日本大震災の復興支援ボランティアの活動をしていました。僕が大学に入学した時には、実はボラセンはなかったのですが、3年生の終わりの時にできたので、そこからボラセンの活動に参加するようになって、障がい者の方の支援やスポーツボランティアといった災害ボランティア以外の活動もするようになりました。

質問



ボランティア活動を始めたきっかけがあれば、教えてください！

はい。身内の方にはすでによく知られている話なのですが、僕はもともと理系を志して航空宇宙（システム工学科）に入ったということもあり、正直に言うとボランティア活動には全く興味がなくて、自分がやると思っていませんでした。どうしてこういうことになったかと言いますと、大学入ってすぐの頃に初めて彼女ができたのですが、まあその方と別れることになりまして、その後、初めてだったからなのか分からないのですが、半年ぐらい引きずっていました。これはどうしようもないなあ、ずっと思っていたのですが、その時にたまたま「東北の震災ボランティア3泊4日」というのが、しかも13000円でそれなりの旅館に宿泊ができて、交通費も入っていて、というのが目に入ってきました。全然ボランティアなんてする気はなかったのですが、本当に「気晴らしの旅行ぐらいでちょうどいいなあ」と思って、「ちょっと遠くに行ってみよう、宮城県なんて行ったこともなかったし」ぐらいの感じで申し込んだのが、本当の一番最初です。

そこで3泊4日、大学生協が主催していた活動だったのですが、北は青森から、南は鹿児島の方からわざわざ来ている人もいて、全国の同年代の学生の人たちとコミュニケーションをとりまして、それ以上に、テレビの向こうの世界だった、テレビでしか観ていなかった津波にのまれた街とか、あとはやつれた顔をしていて避難をしている人とかを目の当たりにして、テレビで観るものと実際に見るものと全然見え方が違ったっていうのは、ものすごく衝撃的でした。そこから、僕の場合は、その役に立ちたいという気持ちよりも、「あのとき何があって、ここではどういうことがあったのかをもっと知りたい」という気持ちが強くなって、1年生の終わりに参加した3月のボランティア活動から、2年生の夏に、2年生の春にと、長期休暇ごとに東北の

震災ボランティアに行くようになりました。きっかけはこのような感じですね。



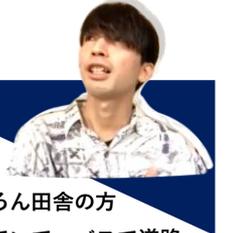
一番最初のボランティア活動が、宿泊を伴うものでしたが、参加するうえでのハードルは高くなかったですか？

そのハードルは高かったので、友達2人を巻き込んで一緒に行きました。「こういうボランティア活動があって、しかも13000円だから、そこまで高くないから行ってみようよ」という誘い方をしたのですが、内心は「ただの気晴らしに行きたい」、最初はですよ、最初は気分を変えたくて行ってみたいということで始めたボランティアでした。

たしかに自分一人だけで参加するのではなく、仲間を誘うというのは、一歩踏み出すうえでの一つのポイントになるかもしれないですね

質問

活動を通して「もっと知りたい」という気持ちが強くなったとのことでしたが、具体的に知りたいと思ったことってどんなことですか？



初めて行った時に衝撃的だったことがあって、その時活動したところが海岸近くの方の家だったので、そこに向かって宿舎からバスで移動をしたのですが、宮城県はもちろん田舎の方の都市なので、畑とか田んぼとかが広がっていて、バスで道路を走っていても平坦というか、周りに高い建物がないということも当然のように見えていました。でもしばらくして、さっきまで畑や田んぼだった平らなところが気付いたら家の基礎だけ残っているような風景になっていて、そこでまず一つ衝撃を感じましたね。

あの時、ここまで波は本当に来ていて、「もしここに残っていたら死んでいたかもしれない」というようなことを感じました。でもその当時活動させてもらっていた畑のオーナーはなんとというか、もちろん僕が初めて行ったのが2014年で、ある程度（震災から）時間が経っていたということもあるのですが、なんか「本当にこの人はあの当時宮城県にいたのかな」みたいな、ヘラヘラしているわけではないですが、特に悲しさが滲んでいるようにも見えず、にこにこしてくれて、「来てくれてありがとう」と言ってくれていました。その畑をもっているのは、割と若い30代前半くらいのお兄ちゃんたちだったので、彼女がどうかの話をみんなですたりしていたのですが、そういう話をしている中でも、やっぱり自然と当時の話、「あの日は自分はどこにいて、何をしていたんだ」という話もしたりしましたし、僕たち学生も話したりして、生き残った人の中でも人それぞれ経験してきたことはそれぞれバラバラなんだなとも感じました。

あとは、宮城県に初めて行ったので、地域性のようなものとは少し違うかもしれませんが、「こっちの方の人たちって、こんなおもしろんだ」ということを感じましたし、僕は理系の人間なのですが、ボランティア活動をしている人たちってどちらかというと文系だとか、あるいは福祉系の学生の人が多いように思っていて、そういう人たちと関わることがそれまであまりなかったので、話すとおもしろかったですね。「そういう考え方をもってるんだ」みたいな。

自分は割と理屈立てていろいろ物を考えがちではあるのですが、良い悪いとかではなく、そういうボランティア活動の世界で出会った人たちは割と感情論でものを話すことも多々あって、本当に「自分が今まで関わってこなかった人と、こういうところに来ると関わることができるのか」というか、そこがとてもおもしろかったので、もっと知りたいとか、もっといろんな人の考えを聞きたいというのが、そこで初めて出てきましたね。

質問

その後始めたスポーツボランティアプログラムの活動では、印象に残っていることはありますか？

基本的に1年目の活動では、障がいのある方のスポーツ大会やパラスポーツ大会の支援がメインだったのですが、始める前は僕自身、「障がいのある人たちって変だな」という考えがありました。どちらかと言えば、あまり関わりたくないと思っていたのですが、スポーツボランティアに誘われたこともあって、「本当に嫌だったらやめればいい」と思って、とりあえず1年と思ってやっていました。その中で本当に印象的だったのが、9月ぐらいにあった「スポーツの集い」という都内の障がい者施設の方が集まって、玉入れとか、大玉転がしとか、リレーをする合同運動会みたいなイベントでした。その時に、リレーで出てきた参加者の人がめちゃくちゃ足が速かったんですね。僕より全然速くて、それを見た時に、障がいのある人ってもちろん知的障がいと言われる人は考えることや判断が遅かったりする部分があるかもしれないですが、別にそれ以外はなんら僕と変わらないし、むしろ僕よりも長けている部分があると、そこで気付かされました。それも実際に目の前で見て、目の当たりにしたことでなんか自分の考え方が変わりましたね。ただの個性なのに、障がい者施設に入って仕事をしたり、生活をしたりしてっていう、その僕との差はなんで生まれるんだっていうのも疑問点として出てきたりもしました。それに周りにいる自分の友達とか、同級生と大差ないなっていうことにも気付いて、別に障がい者の人を避ける必要なんて無いし、道端で困っていきそうな顔をしていたら助けてあげればいいし、別にそうでなければそのままでもいいし、ある意味気を遣わなくなりましたね。そういう考え方をスポーツボランティアで得ることができたかなと思います

質問

学生時代のボランティア活動の経験は、現在のキャリアにどのように活かしていますか？

僕は製造業に勤めているので、当時の経験が直接今に活かしているかと言われると、活かないことの方が多いですね。ただ最近、SDGsの話であったり、東京オリンピック・パラリンピックがあるという話であったりが目立っている中で、会社で、例えば言葉遣いですね、「相手の人にどう伝えるかを考えて言っても、自分が話してる相手はもしかしたら障がいのある人かもしれないとか、LGBT、性的マイノリティの人かもしれない」というようなことを研修で学んでいます。「言葉遣いには気をつけましょう」であるとか、「こういう人がいたらこういう対応をしましょう」というようなことを教えられるのですが、僕にとっては学生の時にかなり学べた内容だったので、「ああ今更やっているんだ」というのが正直なところでした。逆に言うと、他のみんなは会社に入ってから学ばなければいけないのかもしれないけれど、それをもともと知ることができていたので、それが社会人になってから活きているのか、困らなかったことかなと思います。



研修で学ぶことと、ボランティア活動を通して学ぶことに違いはありますか？

研修で受けるのはつまらないですよ（笑）
研修はやっぱり全員問答無用で受けさせられるので、障がい者だとか性的マイノリティだとか、外国人だとか、興味がない人も受けなければいけないですしね。僕はたまたまそういう人たちに興味があったという言い方は変ですが、そういう考えをもっていた方だと思いますが、あとは、学生時代に学んだ方がやっぱり「講師 対 自分」ではなく、「当事者 対 自分」になるので、その方が内側というか、表面上ではない話ができるのかなと思います。



都立大ボラセンYouTubeチャンネルにて

当日の様子を公開中！



参加者の声（一部）

- ・実際のエピソードを交えて話してくれたおかげで、すごくボランティアに興味があった。
- ・ボランティアの経験を重ねるなかで、何を考え、どのように選択をしていったかを具体的に聞くことができた。
- ・「ボランティアを体験で終わらせず、経験として活かしていく」という神保さんの言葉。自身の活動を振り返ったときに、胸に留めておこうと思える言葉だった。
- ・社会人の方から学生時代の話聞く機会があまりないので、とても勉強になった。
- ・ボランティア先での体験談が印象的だった。自分ももっといろいろな人と関わってみたいと思った。
- ・東北の震災ボランティアの話が、自分たちと何ら変わらない方々が突然災害にあわれた、その理不尽さが率直なお話で、強く印象に残りました。
- ・これからの自分の進路に関しても非常に参考になりました。
- ・おふたりともボランティアへの取り組みきっかけと関わり方が興味深く聞きました
- ・活動してこられた体験談が、とても具体的で、自分だったらどうできたんだろうか、と身につまされて考えさせられたから。また、根本的な向きあい方、意識がとてもしっかりされていると感じました。そして、地域活動へのトライアルが容易ではない、という率直な話も伺えてよかったですと思いました。
- ・お話しされていた内容もそうだが、ボランティアセンターでかなり活躍されていた方のお話を伺う機会があったこと、それに参加することができたことが何より嬉しく、印象に残った。
- ・ほぼ毎日ボランティアにかかわっていたと聞き、学業とボランティアの両立って本当にできるんだろうか、といった心配が解消されました。貴重なお話ありがとうございました。